



Title	竹越与三郎に関する思想史研究：「自由帝国主義」者の国家構想
Author(s)	馬, 世汶
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16973号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16973
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99817
Type	doctoral thesis
File Information	Shiwen_Ma_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 馬 世汶

主査 教授 権 錫永
審査委員 副査 教授 川口 暁弘
副査 教授 長谷川 貴彦

学位論文題名

竹越与三郎に関する思想史研究―「自由帝国主義」者の国家構想―

本論文は、政治家・ジャーナリストとして、旺盛に対中政策論、植民地政策論、対外政策論を展開した竹越与三郎の思想を究明しようとするものである。とりわけ、「自由帝国主義」の視点から竹越の国家構想の一端を浮き彫りにすることを目指す。

従来の竹越研究には、大きくとらえて二つの問題点があった。一つは、「自由主義」を分析枠組みとする傾向である。それにより、竹越は「自由主義者」、「貴族的平民主義」者、「自由主義的政論家」として評価され、「戦時下の抵抗者」とまで称されるに至った。国家主義、帝国主義の傾向が十分注目されなかった結果である。もう一つは、竹越の著作を網羅した全集が存在せず、多くの著作が未だに検討されてこなかったことである。そのために、竹越の対中政策論、植民地政策論、対欧米政策論に関する研究は、あまり見るべきものがないというのが現状である。

それに対して申請者は、竹越の著作を徹底的に調査・分析するとともに、「自由主義」の枠組みから離れ、「自由帝国主義」の枠組みを採用する。「自由帝国主義」は、イギリス自由党領袖のアーチボルド・プリム・ローズ・ローズベリーが唱えたものである。竹越はそれを受容し、国内において「平民主義」、対外的に「帝国主義」の立場を明確にした。「自由帝国主義」に注目することは、「平民主義」と「帝国主義」の両側面を総合的に検討することを意味する。

具体的には、三つの課題が設定された。第1に、竹越の初期思想を検討し、対外政策論の基底にある考え方として、彼の調和論的思弁方法の存在を明らかにする。第2に、各時期の日本を囲む国際情勢や、それに対する日本の取るべき対外政策について、竹越がどう理解し、何を提示したかを跡づけ、彼の打ち出した対外政策論の全体像、およびその根幹にある理念、または思考枠組みを明らかにする。第3は、「一国の政治」を論じる際に、「算盤の桁」に合わなければならないという経済重視の視点をもっていた竹越が、帝国主義に対してどのような立場をとったか、同じく経済重視の視点から反帝国主義の立場をとった小日本主義者の三浦鉄太郎との比較を通して明らかにする。

本稿は、初期から晩年の戦時期までの竹越の思想を、「自由帝国主義」の枠組みにおいて詳細に検討した。指摘したのは、①個人主義・平民主義・自由主義を重視した竹越が、強い国家主義の側面をもち、対外的には帝国主義を主張する存在でもあったこと、②竹越が植民地政策の経済非合理性を指摘しながら、同じく植民地政策の経済非合理性を指摘して反帝国主義・小日本主義の立場をとった三浦鉄太郎と違って、国家主義により、帝国主義の立場をとり続けたこと、③竹越の対中認識と対中政策論の実態を論じ、国家主義のために中国に対する寛容な態度をとることができなかった

こと、④その一方で、自由主義への信念は 1930 年代まで変わらず、計画経済論・統制経済論に對抗して、資本主義資本主義体制の維持を前提とし、資本主義の緩やかな修正を目指す「新資本主義」を主張したこと、の四点である。これらを指摘したのは、竹越研究への大きな貢献である。

竹越研究は、平民主義者・自由主義者としての側面に偏った評価に問題点があった。それに対して本稿が、竹越も、近代日本の思想的なメイン・テーマの一つだった個人と国家、自由と平等の問題をめぐる葛藤し、しかしまた、国家の軛から逃れられなかった一人であったことを指摘したことは、強い国家主義の傾向が指摘される日本近代の思想研究において有意義である。本稿は、竹越は自由主義者として、自由主義的な資本主義体制を擁護し、社会主義者・ファシズム勢力、および軍部に対する批判はできても、日本の対外膨張に対する反対者にはなりえなかったと指摘する。この指摘は、「自由主義」が対外的には肯定的な評価の軸にならないとするこれまでの研究を補完する意義がある。また本稿は、竹越が植民地政策の経済的な不利益を認識しながら、植民地と勢力圏を有機的にとらえて対外膨張を支持しつづけ、「世界政策」論を展開したことを指摘するとともに、そのような立場の竹越を、「帝国主義的な「世界政策」論者」と名付けた。この位置づけにはまだ不明瞭な部分が残るが、竹越の帝国主義の主張と「世界政策」論との関係は、帝国主義研究に新たな課題を投げかけるものと考ええる。

一方、竹越が受容したイギリスの「自由帝国主義」について、もっと詳細な検討が必要であり、そうすることによって、さらなる研究の発展が見込めるとの指摘があった。また、対外政策の推進者ではなかった竹越の思想史的な研究の意義を主張するためには、もうすこし工夫が求められるとの指摘もあった。しかし、この課題は、さらなる研究の発展のために提示されたものであって、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

以上の審査の結果、本審査委員会では、全員一致して、申請者・馬世汶氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。